

宵越しの銭を持たなかった池谷朗(1933.10.08.~2003.07.07)

池谷朗先生に初めて会ったのは筆者が担当していた百貨店の京呉服キャンペーン撮影打ち合わせのときで、1984年11月27日のことだった。当時の筆者は、まだ呉服などの世界には全くなじみがなく、撮影と言ってもどういう手順でやって行けばいいのかも、どういう注意事項があるのかも分かっていなかった。そこであるプロダクションの役員に相談したところ、池谷先生を紹介されたのである。

池谷先生は着物撮影に関しては日本の3指に入るプロ中のプロだった。と言うよりも女性ポートレートを初めとする、いわゆる婦人科カメラマンの最高峰の一角を担う巨匠で、その交友範囲も写真家業界のみならず、ファッション業界や繊維業界、そして呉服関連業界、さらには映画情報社に在籍していたこともあり、映画業界や雑誌業界などにも広い人脈を持っていらした。その昔流行っていた週刊平凡パンチの表紙撮影、さらには当時、週刊誌の表紙を飾っていた美人の撮影に関しては、秋山庄太郎先生と共に双璧をなしていたのである。

由美かおるが50代になってヌード写真集『生まれたままの妖精』を出して話題になったが、このときに撮影をしたのも池谷先生だった。彼は由美かおるの写真集のほとんどすべてを手がけており、西野バレエ団の代表西野皓三氏とも家族ぐるみのお付き合いで、緊密な関係にあった。

また先生は1995年9月に彼の写真家としての40周年を記念して、『金環蝕』という写真集を竹書房から出版しているが、ここに登場する女優は日本の一時代を画した女優ばかりである。由美かおるを筆頭に、アグネス・ラム、岡田奈々、夏目雅子、沢口靖子、太地喜和子、萬田久子、夏木マリ、石野真子、松本伊代、服部まこ、大場久美子、中島ゆたか、松尾嘉代、五月みどり、山口百恵など24名に上っている。団塊の世代にとってはどの女優も今は懐かしい面々である。しかも山口百恵や沢口靖子などの一部女優を除いて、殆どがかなり的大胆ポーズである。これも先生の人格によるものではないかと筆者は感嘆したものである。と言うのも先生は無理強いしたり、また本人にとってマイナスになるような写真を掲出するようなことは、行わない人だったからである。そういう点ではマネージャーからも、また女優さん本人からも信頼されているようだった。

広告写真などにおいて、先生は5×7インチのリンホフを主に使っていた。デジタルカメラなどなかった時代、フィルムサイズが大きいことは、それだけ鮮明な画像が期待できるわけで、当時4×5インチが主流だった時代に、あえて先生はもうワンランク上の機材を使用していたのである。ここから得られる画像はさすがで、引き伸ばすまでもなく現像済みのポジを見れば、そのよしあしが一目で分かるほどだった。しかしこのカメラは黒布をかぶって拡大鏡を使い、天地逆像でピントを合わせるもので、使い心地は芳しくない。現在のオート・フォーカスカメラに慣れ

てしまうと、とても使いこなせる代物ではなかった。恐らくこんなカメラを使える写真家はもう殆んど亡くなられてしまっただろう。最近では中古カメラ店に行っても、この手のカメラはあまり見なくなった。そういう点ではまさに時代物である。先生はまたアメ車が世の中から遠ざかってきている時代に、キャデラックに乗っていた。外車の中でもカメラ同様に、ワンランクもツーランクも大きかった。六本木あたりでも当時キャデラックを見ることはあまりなかった。このためかヤクザすら先生の車を避けて通る、と言われたほどだった。また先生は小柄ながらその風貌は三木のり平にかなり良く似ており、間違えられることも少なくなかった。ヤクザも間違えていたのかもしれない。

さて筆者がお願いしていた撮影は同年12月1日順調に終了して、先生は夕食に誘ってくださった。呉服の世界と云うものは、カメラマン、モデル、スタイリスト、それにヘアメイクと、すべてが日ごろの人間関係で繋がっており、筆者もこの一員に組み込まれる形になった。そして広尾近くの中華料理店へ十数人の全員が集まったわけである。食事の後はカラオケである、当時はカラオケが流行り始めた頃で、先生も筆者も相当な音痴だったが、これに付き合う羽目になった次第である。モデルさんの中には殆どプロと思しき確かな音程と、素晴らしい歌唱力を披露する女性も少なくなかった。そんなこんなで終わったのは夜11時を過ぎていた。しかし先生と筆者は妙に気が合うところがあって、これを機会に先生の生涯にわたり、お付き合いさせて戴くことになったのである。

先生は一言と言って気風のいい江戸っ子気質のところがあった。いつも勘定は先生がクレジットカードで支払っていた。一体どのくらい飲食費に使っているのか、少々心配になることも多かったし、これじゃ多分、家族がその余波を受けているんだろうなと思ったこともしばしばだった。まさに宵越しの銭は持たネーと言った江戸っ子気質が、そのまま表れていたのである。

この年の忘年会には筆者も招待されたが、2次会が終了したのは何と午前4時半で、5時から8時まで仮眠して9時半には出社するサラリーマンには、辛いお付き合いだったが、以後もこんなことはしばしばだった。そしてまた1ヶ月ほど経ったとき先生の写真展が新宿の西口ペンタックスギャラリーで行われることとなり、筆者が初日の開会式の司会を務めることとなった。ここには先生の師である大竹省二先生、大竹先生の愛弟子である沼田早苗氏、それに大竹先生のお弟子さんたちの集まりである『バンブー会』の面々が集っていた。と言うわけで、いきなり見知らぬ人の中で司会を務めたわけだが、筆者はなぜか結婚式の司会を20回以上こなしていたので、上がることもなく淡々と進行することができた。先生からお礼を言われ、以来大竹先生や沼田早苗氏を初めとするバンブー会の方々とも面識が広がり、後にはバンブー会の司会も務めるようになった。写真家の方々と広くお付き合いさせて戴くこととなり、後に織作峰子さんなどとも知り合いになった。これが縁でAPA

(社団法人日本広告写真家協会)などにもお付き合いが広がり、とりわけバンブー会からは毎回招待されるようになったのである。

先生の個展が終わってしばらく経つと、先生から電話があった。「飯でも食おうよ」と言うお誘いだったが、麻布スタジオにいるから暇なら帰り際に寄ってくれと言うことで、麻布スタジオに行くと、ちょうど撮影が終わったところで、モデルさんと3人で近所の寿司屋へ行った。以後先生はモデルの撮影があるたびに、筆者を誘ってくれて、勿論そのモデルさんやタレントさんを紹介してくださった。そういう点では独身だった筆者にとっては、文字通り一番美味しい食事だったかもしれない。また先生はタレントさんが、例えば寿司屋の娘さんだったりすると、食事するためにその寿司屋さんまで、かなりの距離も厭わないタイプだった。こんなマメさと律儀さが、他人から信頼される要因だったのだろうと思う。煩雑なことでも他人から頼まれると、全く断れないところがあった。

筆者が担当していた百貨店は、呉服の撮影が多かったから、おのずと先生にお願いすることも多くなり、ほとんど毎週お目にかかるようになった。制作する広告物の打ち合わせ、モデルさんのオーディション、さらにはお得意が希望するポイントの確認など、一つの作品を完成させるには数回お会いするのが普通になっていた。乃木坂の先生のスタジオに会社の帰りにお邪魔し、そのまま食事、そして時にはカラオケが付いてきた。もうこの頃になるとお互いの気心は知れるようになり、何もかもがスムーズに進行していた。

やがて春がやって来て、どちらからともなくお花見をやろうと言うことになった。青山墓地の通路に莫菴を敷いて、ロケのときに使う発電機を持って来て、カラオケセットと電気をつけて、紅白の幕も張って本格的なやつをやることになった。写真撮影のときにいつもお願いしているスタイリスト会社の社長も一枚乗ってくれて、墓地の管理事務所へ行き、「お花見やらせてもらうけど、いいですか」というと、「まあ1年に1度のことだから、いいとはイワンけど、駄目とも言いませんネェ。」との返事だった。これはOKって言うことだよと、早速準備にかかり男性の会費は5,000円、女性は1,000円でまとまった。足りないところは先生と筆者が負担することにしたのである。

当日1985年4月5日の金曜日は、花冷えでメチャクチャ寒かった。用意していた毛布を全員でかぶるほどだった。従ってそんなに寒い日に、のんきに花見などやっているのは我々だけ。週刊誌の記者がやってきて、「この寒い中、花見すると言うのはどういう趣旨ですか」とか、いろいろと聞かれるほどだった。余程のスキモノ集団と勘違いされていたのだろう。でもこの中には当時のNHKの朝の連ドラで主役を務めている女優さんもいたし、結構な大女優さんもいらしており、先生の集客力はさすがだった。しかもいい場所が押さえられていて、トイレが近いところにあり、水道もすぐそばだった。こんな花見はそうそうなかったから女の子たちはキャー

キャー言って喜んで、カラオケを歌いまくった。しかし若い男は少なく、我々中年のおじさんが多く、ここがイマイチ不満の残るところではあった。食べ物がだいぶ少なくなってくると、近所のお寿司屋さんから握り寿司が運ばれてきた。先生がいつも利用している寿司屋さんが特別に出前してくれたものだった。これでまた一段と盛り上がり、花見の宴はさらに続いた。ところが途中で警察が廻ってきて、新左翼が国会議事堂周辺から六本木方面で騒いでおり、気をつけるのと早めに終了するようにと警告にやって来たのである。「みんなでここに加わって、1杯呑んで一曲歌ってから帰りなさいよ」と誘ってみたが、さすがに「勤務中でスンで」と断られてしまった。まあ、そんな飛び入りもあって、10時過ぎまで飲んで騒いで、後片付けは大変だったけど、楽しい一晚を過ごすことができた。そしてさらに2次会である。結局終わったのは午前4時になっていた。

支払いの清算も大変だったが、スタイリスト会社の女性社長は、「私たちも楽しませてもらったから、見積もりの半分でもいいですよ。それよりまた来年もやりましょう。」と言ってくれた。この社長はその後オーストラリアへ移住していたが、そちらの地で世を去った。筆者は赤坂の素晴らしい自宅マンションにまで招待されて、この社長には大層お世話になった。社葬が行われ、新しい社長には彼の新入社員時代から一緒に仕事をしてきた男が就任したが、まだ若かったこともあって、経営自体は楽しなかったと思う。しかしその直後にやってきたバブル景気が彼を支えてくれた。彼は現在も相変わらずこの会社の社長を続けており、今では社長業がすっかり板について来ている。

それからしばらくすると、証券市場が活気付いて来た。いわゆるバブル景気の始まりである。日本中がバブル経済にわき立った。企業が余資の運用のために株式に投資して、利ざやを稼いだり、銀行から資金を借り入れて、これで株式を購入したり、日本中がいわばアブク銭に沸いていた。先生の周辺には、かつて和服のモデルをやっていたモデルをやめて、当時1部上場のオーナー企業の社長秘書をやっていた女性がいた。彼女の妹さんがこの会社の社員で、その紹介でこの企業に入社することになったらしい。この企業も株式の投資に参入しており、この秘書からの情報を元に提灯買いをすると、いくばくかの利益が得られることも多く、筆者もこの提灯にならって、株式投資などをやってみた。先生との会話も株式の話が多くなった。作戦会議と称して喫茶店に資料を持ち込み、どの会社を買うべきかを検討したのである。

そしてまた第2回目の花見の会を青山墓地で行った。しかし去年は出費がかさみ過ぎたので、今年は少し控えめに比較的工作仲間を優先させて、あまり広く声掛けするのはやめる事にした。それでも15~6人近くが集り、相変わらず2次会が終わったのは午前2時ごろになっていた。筆者はそれからあちこちに人を送って行ったため、家に帰ったのは午前5時ごろ、翌日の土曜日は爆睡して過ごすこと

になった。しかしこの翌年は桜の季節が APA の写真展と重なったために花見は中止、以後は行われなくなった。この頃になると次第にバブル経済も収束期を迎え、資金繰りや、作戦会議が忙しくなってきたからでもある。しかも筆者には新たな得意先が加わって、さらに仕事が忙しくなっていた。

ところが新しい仕事が一段落した頃、1988年5月1日付けで、筆者は制作部門から営業部門へと異動になった。経済全体が活発化しており、日本経済の実態が根底から動き始めており、営業職がかなり不足し始めていたのである。そこで会社は全社で100人ほど営業職を増やすことを考えていた。しかもそのうち半分ぐらいを、制作部門から営業部門へ異動させようとしていたのである。筆者は見事にこの網にかかってしまったのだ。

しかし先生とのお付き合いも、また先生と始めた株式投資も順調に進んでいた。そして1989年12月には平均株価が38,957.44円にまでなっていた。しかし翌年から株価が急激に下がり始めた。経済が変調をきたしていたのである。にもかかわらず、1990年4月1日~9月30日まで183日間『花博=国際花と緑の博覧会』が大阪で開催された。この頃はまだ日本経済は順風満帆の中にあると勘違いして、殆どの人は疑わなかったのである。この時期、国を挙げた祭典はこの花博が最大のものであったろう。筆者も会場まで足を運んだが、疑問符が付くほどつまらないものだった。「何のために何をするか」と言うことが明確にならなかったばかりか、恐らく出展者もまた主催者もよく分かっていなかったのだと思われた。しかしこの頃になると、筆者もようやく営業職が板についてきて、制作の手配から媒体の手配まで、広告作業のすべてに携わるようになっていた。半面、時間の自由は制作の時代とは異なり、融通が利かなくなり、先生とお会いする機会も減って来ていた。毎日が得意先との折衝に追われていたのである。そして社内勉強会が増えていた。パソコンなるものが社内でも普及し始めたからであった。

一方、既に景気のかげりが見え始めていた。1990年になると株価は急速に下がり始めて、先生としばしば作戦会議を行わざるをえなくなっていた。しかもバブルの破綻によるさらなる株式の暴落が足元に忍び寄っていたことに、当時は誰も気がつかなかった。先生はこの間の株価上昇期に得られた収益で、いつものように周辺の人間に気前よくご馳走していたから、株価が下降線に向かうと、経営資金にも多少の影響が出始めていた。そこで中小企業の資金援助をする金融機関から、低金利で資金を調達することになった。1,000万円を借り入れて、筆者が連帯保証人となったのである。このおこぼれで筆者は300万円を借り入れて、全体の返済額の3割を負担することにした。こんなこともあって先生とのお付き合いは、親戚以上に親密になっていた。たまたま当時の先生のオフィスは乃木坂にあり、筆者も乃木坂のマンションに居住していたから、近辺でよく一緒にお茶を飲んでいて、そして先生は年末年始を家族と妙高高原に行きスキーを楽しむ予定だから一緒

にどうだろうと誘ってくださった。家族を紹介しておきたいとの気持ちもあるようだった。いい話ではあったが、筆者にはスキーに関する嫌な思い出があった。数年前、蓼科高原の友人の別荘に行ったとき、みんなでスキーに行こうと言うことになって、筆者もお付き合いしたのだが、スキーは初めてだった。しかも別荘を出たのが昼過ぎだったから、貸しスキーはもう殆ど残ってない。オンボロの板を借りることになってしまった。その上まだ雪はあまり積もっておらず、所々にブッシュが残っている最悪の状態だった。そもそもリフトに行くまでが大変だった。坂をカニの横ばい式に上って行くのだが、これがうまく行かない。「エッジを効かせるんだよ」と、友人はアドバイスしてくれたが、このスキーのエッジは既に磨耗しきっており、そんなものは全く効かなかったのである。おかげでリフト乗り場に行くまでに3回も転んで、そこはヌカルミだったからドロドロになってしまった。そしてリフトを降りると友人はスキーのベテランだったので、一気に下まで下りて行ってしまった。筆者はただ一人悪戦苦闘していたが、やがて友人が「どうれ、教えてやるから!」と言って、「じゃあ、ここから向こうへ滑って、腰を低くかがめるんだ。」その通にしたところまでは良かったが、目の前にブッシュが現れた。片足はこのブッシュを逃れたものの、もう片足はブッシュに取られた。そこで思い切りよく転倒である。腰を打って息が出来なくなった。おまけに板とヴィンディングを固定しているネジが抜けて、板が使えなくなった。やむなく頂上まで板を担いで、リフトで下ることになってしまった。みんなが笑っていた。周囲の見知らぬ人間まで笑っていた。リフトは上るために出来ている。リフトで下ってくるヤツを見たのは初めてだというのである。確かにその通だった。1時間の約束で借りたスキー板は、おかげで30分で返すことになった。しかも板を壊したと言って修理費を請求したいと言い出した。筆者は「冗談じゃない。ここを見て下さいよ。この板はネジが抜けた後がいくつもあって、それを補修した後だらけじゃないですか。そもそもこんな板を有料で貸すこと自体が暴利じゃないですか。こちらとしてはおかげで30分しか使えなかったのですから、利用料を半分返してほしいですよ。」と食い下がった。相手も納得して、それ以上のことは言わなかった。そんな事件があって筆者はスキーにはかなりのアレルギーがあった。このため先生からのお誘いはお断りしてしまったのである。

それから何年も陰鬱な時代が続いた。日本全体が病んでいた。にもかかわらず政府も日銀もこの経済破綻に全く無頓着だった。恐らく日本の経済史において、戦時以外では最低の時代だったろう。この無能さのためか、生え抜きだった日銀総裁は退職後、再就職もおぼつかないほどだった。

そうこうしていたとき、1994年の秋風が吹き始めた頃、先生から[広告写真展](#)を全国で行いたいから協力してほしいとの依頼があった。何でも『[ビエンナーレ広告写真展](#)』と称して、北は北海道から南は九州まで、あちこちの美術館とタイアップ

するカタチで、それぞれの地で1~2週間ぐらい開催したいと言うのである。主催は社団法人日本広告写真家協会、先生が実行委員長で、審査委員長には秋山庄太郎先生。後援には通商産業省、文化庁、オーストラリア大使館、フィリピン大使館、ペルー大使館、ベルギー大使館などがついているのだと言う。そうそうたる顔ぶれである。先生も大変な仕事を引き受けられたわけで、筆者も全面的に協力することにした。特に大きな問題となったのは会場の設定で、ご存知のように美術館などでは、数年先の予定が入っているところも少なくない。特に東京ではむしろそれが当たり前になっている。そこで筆者は当時お得意先でもあり、役員等にも知り合いがあったフジテレビに話をもちかけて、上野の森美術館を借りることが出来ないかの交渉に入った。ここでは少し前の1993年 MoMA の美術展を行い、イベント告知広告から、集客までを筆者の部局やクリエイターの佐藤雅彦氏、佐々木宏氏が担当して、100万人以上の集客に成功した実績があったからである。そこで筆者はこの写真展を成功させるためには、会場を如何に設定するかにかかっていると考え、まず地元の新聞社を募ることにした。地方の県立美術館等は、地元の新聞社との関係が深いからである。そこで協賛してくれる新聞社等を選び出し、その新聞社の事業局を仲間に引き込んで、そこから会場を探してもらう作戦に出ることにしたのである。それで新聞局の担当者へのアプローチから動き始めることにした。嬉しいことにフジテレビはたまたま上野の森美術館が空いてる期間があったため、この期間ならOKとの返事が来た。またフジテレビが決まった以上、産経新聞社にも筆者が勤務する代理店の新聞局を通じて、協力を要請した。これが意外とうまく行って、産経新聞の事業局も東京展の共同主催を快諾してくれたのである。それに後援としてフジテレビジョンと産経リビング出版社が、快く引き受けてくれた。後は北海道から九州までの後援の媒体社探しであったが、会場設定と併せて、これも新聞局と共に動いて北海道では北海道新聞社と北海道文化放送、さらには北海道近代美術館がOK、東北地方では河北新報社、中部地方では共同主催に岐阜県美術館と岐阜新聞社、岐阜放送が名乗りを上げてくれた。関西でも産経新聞社と滋賀県立近代美術館が共同主催者となり、九州では共同主催に福岡県立美術館と西日本新聞社が、次々と決まって行った。実はこの写真展は1992年にも行われていたが、会場が美術館で行われることはなかったのである。仙台では残念ながら、百貨店での開催となったが、余りにも時間のない企画であったから、これは止むを得ないところでもあった。筆者はこのとき今までに先生に対して多くのカリを作っていたものの、これでやっとお返しが出来たと思った。先生のAPA内での面目も躍如と言うところだったのである。そして1995年2月22日上野の森で始まった展覧会は、1995年12月10日の北海道近代美術館に到るまで無事に進捗して、終了することが出来たのである。先生は以来、カメラマンとしての仕事よりもプロデューサーとしての仕事の方が多くなっていった。

先生はビデオの制作をも手がけるようになり、おまけに乃木坂の事務所には若い女の子の歌手が入ってきたのである。何でも彼女が所属していたプロダクションが彼女をめぐる他のプロダクションと争奪戦となり、いろいろと話し合った結果、先生のところで預かってくれるなら OK だということだったので、しばらく預かることにした、と言うのであった。彼女の叔父さんは筆者が奉職する代理店で営業部長をしており、彼女も然るビールの広告のキャラクターを務めていた。しかもその得意先を担当する営業は、筆者とも顔見知りの人間だったのである。そんなこともあって先生が彼女を連れて、会社の方に挨拶にも来られて、筆者にとってはこれはちょっとした事件だった。しかし先生は彼女の叔父上のところへも挨拶されて、とりあえずデビュー戦は成功したわけである。しかし芸能タレントを一人抱えることは大変なことで、ボイストレーニングや、付き人や、営業活動など、まだまだやらなければならない案件は少なくなかった。しかし付き人としてもう 70 過ぎのジイ様が現れてから問題は徐々に解決していった。この方はこうした経験が長く、顔のつながりもあり、自分の孫の面倒を見るように、彼女をよく連れまわし、また芸能界に浸透させてゆくことにも万事ソツがなかった。我々はこの方をジッチャン、ジッチャンと呼んで親しんだ。しかしあるときジッチャンが風邪を引いて休んでしまった。ところが名古屋での仕事があり、誰かが付いてゆかねばならず、ついに筆者にお呼びがかかった。1泊2日の行程で、まず名古屋の広告代理店に挨拶に行き、その夜、市内の会場で2曲ばかり歌わなければならなかったのである。しかもこの名古屋の広告代理店というのが筆者の勤務先の名古屋支社だったから、何ともバツが悪かった。それでもママよとやってみたら、案の定同期の連中に出くわして、この件を説明するのに大汗をかいてしまったが、後は何とか切り抜けることが出来た。このタレントとはその後も縁があって、その夏、岩手県でおこなわれた国体に伴い、遠野で行われた写真撮影会のイベントにも同席することとなり、早朝6時に起きて先生の車で、このタレントさんと、アサヒペンタックスの人、それに筆者と4人で、まず花巻へ向かった。既に東北自動車道は出来ていたものの、道中はさすがに長かった。途中運転を交代したが、かれこれ500キロの道程だったのである。そこから遠野という町には行って、そこでペンタックスが主催する写真撮影会が行われ、夜には町の歓迎晩餐会があった。これがまた県会議員やら町会議員やら政治家の集まりに、場違いな人間が参加しているわけで、話の内容はトンチンカン、先生も筆者も冷や汗ものだった。おかげで食うものも食えずに、帰りに町が用意してくれたマイクロバスに乗り込み、運転手さんに「コンビニがあったら止めてください」と言うと、運転手さんが「遠野の町にはコンビニにはありません。」と一蹴されてしまった。それでも宿に着いてみると、運転手さんからの連絡で、オニギリが作られており、何とか空腹だけは満たすことが出来たのである。今ではこの町にもコンビニには出来たろうが、震災の後は人口の減少に悩まされているのだろう。

年頃の女の子でちょっと可愛いと、若い男たちが寄って来る。よほどの覚悟が本人にないと、そこから私生活が乱れ始めて、タレントとしての才能がいくらあったとしても続けてゆくことはできない。彼女も通っていた夜間高校の男子生徒と出来てしまって、間もなくこの業界から消えていった。この男と別れて戻りたい意志もあったようだが、もう先生の方の受け入れ態勢も終了していた。その後この子のヌード写真が週刊誌などに掲載されたこともあったが、この子がどうなったかは筆者も知らない。若いタレントによくある哀れな末路だった。

それからしばらくたった時、筆者の家族内でも不幸があった。1998年12月22日に義兄が亡くなったり、姉と母が病床に着いたりして、筆者は乃木坂を引き払って実家に帰った。先生とお茶を飲んだり、食事をするのは相変わらず続いていたが、さすがに機会も少なくなり、先生にばかりご馳走になるのは憚られて来た。そこで筆者が負担することもしばしばになって行っただが、一緒に女の子を交えて飲んだり歌ったりすることも少なくなった、せいぜい忘年会のときぐらいになって来た。

モデル撮影には相変わらず、つき合わせてくれた。時には先生が指導するカタチの水着撮影会や屋外でのポートレート撮影会にも連れて行ってくださった。景気は落ち込んで、大きな仕事は乏しくなってきたのである。あるとき先生は筆者の年齢を尋ねられた。そしてAPAについて語り始めた。実は会費がたまって来たので、APAとしての不動産をもってAPA会館を建てたいという意見も多くなっているのだと言う。まだバブルの余波も残っているご時世だから、もう少し待った方がいいのではないかと筆者は進言したが、先生も同意見だった。当時のAPAは名誉会長に秋山庄太郎氏、顧問に中村正也氏、会長には西宮正明氏が就任していたが、最近の状況では会長になりたがる人間がいなくなっているのだそうだ。それもそのはずで、会館などを建てるとなると、役所に交渉したり、あちこちから寄付金を集めたり、本業を無視して死ぬ覚悟でやらなければならない。このときには結局藤井秀樹氏が会長になることで納まったものの、池谷先生が随分「俺も手伝うから」と言って藤井秀樹さんを説得したらしい。そして先生は最後に付け加えた。「事務局長のイスが空いているんだけど、これは写真家以外の人間が座ることになっている。ところが今このイスを狙って、全く売れない写真家が虎視眈々なんだ。山田さんAPAに来ないかね。俺は事務局長は代理店の人間が一番向いていると思ってるんだよ。写真業界の人間は人間関係の範囲も狭いし、役所などに対する交渉能力もない。」筆者は答えた。「後、数年で定年になるんで、そのときはぜひお願いしますよ。」そんな会話があってしばらく経ってから、先生が脳梗塞で倒れたと言う話が耳に入った。それで2002年11月16日、厚木市にあるリハビリテーション病院に、藤井さんと言う女優さんと一緒に先生をお見舞いに行った。先生とは簡単な意思の疎通は出来るけれども、先生はしゃべることが出来ずに、筆談による以外の方法はなかった。先生に食べて戴こうと思っておいしいトマトを

仕入れて持参したが、この病院では食事はすべて病院が出すものに限られており、結局持って帰る羽目になった。一方、女優さんは彼女は北海道の出身だったから、郷里から取り寄せた鮭の筋子を持って来たが、同様だった。いつか全快して以前のように一緒に食事をして、お茶を飲んだり、カラオケに行ったりすることを期待していたが、良くなることはなかった。秋山庄太郎先生の訃報も池谷先生はベッドのテレビで知った。それから数ヵ月後、2003年7月4日、筆者は先生が危篤状態になられたことを聞いて、病院に見舞った。このとき初めて奥様とお嬢様にお目にかかった。そして2003年7月7日、先生は返らぬ人となった。筆者は新聞局を通じて読売を除く各新聞社に訃報記事の手配をした。読売だけはAPAで行うということだったのである。しかし訃報記事は読売だけ掲載されなかった。先生の言われたとおりだった。「事務局は代理店の人間がいい。写真業界の人間は・・・」

ご葬儀には昔の呉服撮影の一行が集った。みんな先生には一方ならぬお世話になった方々だった。しかしもうカラオケはない。葬祭場まで筆者の車で向かった。筆者はずっと考えていた。先生のことだから、多分借金も残されているだろう。これを何とか少しでも埋め合わせすることを、考えなければならぬ。と思っていた。しかしその方法はすぐには見つからなかった。筆者は先生の葬儀の後、献杯の音頭をとらせていただいた。男兄弟のなかった筆者にとって、先生はいわば兄のような人だった。お互いに助け合い、励まし合いながら、かれこれ18年余の歳月を共に生きてきた。先生はいつも筆者のことを「俺の親友」だと言って、いろいろな方々に紹介してくださった。大竹先生に対しても、秋山庄太郎先生に対してもそうだった。筆者の心にぽっかりと大きな穴が開いたような気がした。

葬儀が一段落した頃、先生のお弟子さん達と、先生の写真の整理を始めることにした。毎週土曜日に乃木坂の先生の事務所に集った。お嬢さんもこれを手伝ってくださった。お嬢さんは美人だった。先生の全てのDNAを拒否したのかと思われるほどの美人だった。奥さんがモデルをやっていた方だったので、そのDNAを多く引き継いでいたのだろう。しかも普通の美人ではなかった。どちらかと言えば妖気漂う美人だった。男心をとりこにするような、恐ろしいほどの美人だった。あるとき筆者はNTTにコネを作ることに成功した。名古屋のNTT館でパソコンの種々の取り扱い方や、データ送信の実験をするコーナーで、使用するソフトを探しているという話を聞きつけたのである。そこで先生が撮影したいいくつかのポートレートを使ってもらおう交渉をした。何とか100万円の予算を獲得することが出来た。この当時やっとなパソコンが普及し始めたときで、故人にとっては最初のデジタルへの進出になった。この中からタレントさんに、わずかな使用料を支払い、人件費をのぞいて、何とか70万円を先生の口座に振り込むことが出来た。先生に対して恩返しが少しは出来たと思った。しかし、最初は熱心だったお嬢さんも奥さんも、次第に遠ざかって行くのが明らかに感じられてきた。筆者はここが

潮時と思った。先生には申し訳ないとは思ったが、ご遺族にその気持ちが薄くなって
いる以上、どうすることも出来なかった。ちょうど先生が亡くなられた 1 年後
にこの作業から足を洗った。しかし先生が「定年後には APA に来て事務局長に
なって、いろいろと手伝ってくれよ。」と言われていたことは、忘れることが出来
なかった。それで先生が亡くなられてしばらくたったとき、藤井秀樹先生にお目
にかかって、この間の池谷先生とのいきさつに関して話をした。藤井先生が APA
の会長でいる限り、ぜひ協力してほしいとの依頼を受けた。しかし定年を迎えた
ときに、社からも現作業を継続してやって欲しいと懇願された。筆者は迷った。
そこで月、水、金は現在の作業を継続し、火、木、土を APA で勤務することで、
双方から了解を取り付けることに成功した。

しかし筆者が APA に行くと言う話が伝わると、APA 内部から異論が起こった。
本来 APA では事務方は、カメラマン以外の者が行なうことになっていたが、この
内規を破ってカメラマンでありながら撮影の仕事のなかった男が、これを無視して
事務局長代行的な仕事についていたのである。先生が生前におっしゃっていたあの
男である。彼はあるベテランカメラマンを引き込んで、このカメラマンを会長に
就任させて、自分も事務方にとどまることを目論んでいた。つまりある種の内乱を
起こしたのである。藤井秀樹先生はこれに嫌気をさして、さっさと APA を止めて
しまった。筆者は藤井先生以外の人と APA を運営して行く気持ちはなかった。
それは先生の遺志に背きかねなかったからである。APA 幹部には他にも知り合いも
多く、この事実をひっくり返すことも不可能ではなかったが、思いとどまることに
して、社に残った。しかし藤井秀樹先生の後継者に割り込んで来て、会長に就任した
ベテランカメラマンは、間もなく急逝した。そして藤井秀樹先生もその後間もなく
世を去って、APA の力も次第に衰えて行った。世はフィルムカメラ時代から、
デジタルカメラ時代へと移行していた。秋山庄太郎先生も、大竹省二先生もそして
池谷朗先生もフィルムの中に生きて、事務所は撮影済みフィルムの倉庫みたいなもの
だった。先生は生前「墓地下の事務所も 40 年もこの稼業を続けていたら、ポジ下
になっちまった」と言って笑っておられた。『金環蝕』の出版記念の挨拶のときである。

今ではご遺族と顔を合わせることもない。時々思うのはあの妖気漂うほどに
美しかったお嬢さんのことである。5 歳年下の商社マンと結婚したとのことだった。
今頃は異国の地で、生活されているのだろうか。それともあの美貌のために、広い
東京のどこかで、違う仕事に就いているのだろうか、筆者の心に小骨のように刺さって
くる。美人親子が商売をやったら、いい収入になるだろうと思っていた。一卵性
双生児みたいな親子だった。先生も晩年はこの親子の間に入る事が出来ずに、家に
帰らず筆者と食事していたように思えるほどだった。先生がモデルさんとの食事に
誘ってくれたのも、モデルさんと二人だけで食事して、家庭内に波風を立てたくな
かったからではと思った。筆者が元気なうちに、命日に墓参に行きたいと思っている。